

# 西岩田・瓜生堂遺跡

試掘調査報告書 I

1976・4

瓜生堂遺跡調査会

## 序 文

東大阪市は、旧河内国でもその中心部にあたり、原始・古代以来の各種各様な文化財、伝統等を今日まで数多く伝えている地域と言えます。東大阪市西岩田・瓜生堂から若江西新町にかけての一带も、古く弥生時代よりその歴史の萌芽を見、今では周知の古代集落遺跡としてその文化的、学問的価値を高く評価されている地域であります。この付近一带の歴史については古くより漸進的に解明されつつありますが、今なお、不明な点も多く、現在、そして、これからの体系的・総合的な調査研究に期する処も多いと言えましょう。都市再開発化、あるいは、産業発展化の渦中であって、祖先の残した数々の文化的遺産と創意を今に伝え残すことも我々に課された任務と言えましょう。

そして、今までの地道な調査、研究によって、一步一步歴史の持つ真理と包摂性の解明への途をあゆむことができるならば、今回刊行するこの小冊子の意味の一端をも理解していただけるのではないかと思います。

なお、調査にあたって御理解と御協力を賜った近鉄住宅建設株式会社、モリタ建設株式会社、東大阪市教育委員会の関係各位には心より感謝の意を表する次第です。

1976年4月

瓜生堂遺跡調査会

理事長 小林俊一

## 目 次

1. 調査に至る経過	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の概要	4
4. 出土遺物	6
5. まとめ	7

## 図版

## 例 言

1. 本冊子は、瓜生堂遺跡調査会が、近鉄住宅建設株式会社の委託を受けて実施した八戸ノ里第3ガーデンハイツ新築工事（東大阪市内西岩田地区）に伴う西岩田・瓜生堂遺跡の試掘調査報告書である。
2. 現場における調査は、当調査会調査主任 今村道雄、調査員 新田 洋が担当し、植森俊夫、中西正信、阪本 勝、武藤彰夫らがこれを補助した。
3. 調査後の整理、及び、本冊子作成については今村道雄、新田 洋があたり、新田 洋が第1章～第4章を、今村道雄が第5章を執筆し、それぞれに文責がある。また、調査員曾我恭子、毛利光用子、阿部幸一、調査補助員 木村宏史、成海佳子、森正哲次、森田孝一、屋敷 潔らが協力し整理を助けた。全体の監修は、調査部長 田代克己、事務部長 藤井直正が当たった。
4. 調査の実施、進行については、近鉄住宅建設株式会社、片岡勇藏、阪上隆両氏、モリタ建設株式会社、奥山幸夫氏ら三氏、東大阪市教育委員会社会教育部文化財課、関係各位、諸氏の格別の御協力を賜わった。ここに記して感謝の意を表する。
5. 調査の地区割は瓜生堂遺跡地区割方法を用いた。
6. 花粉分析は広島大学安田喜憲氏、木器材質鑑定は近畿大学西田正基氏に依頼した。
7. 周辺部については後日追加調査をし、その調査結果は西岩田瓜生堂遺跡試掘調査報告書Ⅱとして発行する予定である。

## 1. 調査に至る経過

大阪都心部への近距離範囲にあって、東大阪市は西からの開発の波と、一方、ベッドタウンとしての重要性をも込み入れて、現在、そして、将来への都市再開発化ビジョンの中で、行政的にも、文化的にも、今、その課題の渦中に立たされている感がしないでもない。

この度、東大阪市西岩田3丁目、近鉄奈良線、八戸ノ里駅東北東約500m地点において、近鉄住宅建設株式会社によって、八戸ノ里第3ガーデンハイツの新築工事計画がなされた。

しかし、建築予定地域である西岩田一帯は、遺跡の存在・遺物の出土が予想される地域であり、その事前調査の必要は必至であった。この西岩田3丁目付近は、古くより西岩田遺跡として知られており、昭和46年度の下水管渠築造工事に伴う発掘調査によって、古墳時代より平安時代までつづく集落跡であることが判明している。建築物遺構と共に、多量の遺物出土をみ、その中には畿内と播磨、吉備との交流を示唆する土器も含まれており、文化的・学問的にも重要な遺跡として注目されるに至った。この遺跡範囲は、南北、東西共に200～300mにも及ぶと考えられ、今回の建築予定地域まで延びている可能性は十分予想される。

また、この西岩田遺跡に隣接するように、南に瓜生堂遺跡が存在する。この瓜生堂遺跡については、今日までの発掘史が物語るように、弥生時代の墓地（方形周溝墓など）をほぼ完全な形でのこす遺跡として、又、集落と墓地の在り方、階級社会の生み出される過程の一現象を示唆する重要遺跡として全国的な注目を集めている。弥生時代の農耕社会の構造、古代景観の復原等、瓜生堂遺跡の全貌については漸進的に解明されつつある。なお、この遺跡も南北、東西共に500m以上に達する範囲をもつと考えられ、今回の建築予定地域まで北延する可能性は十分考えられる。

この高層マンション建築予定の話と、それに伴う対応策、調査等については、東大阪市教育委員会より当調査会へ調査委託という形で持ち込まれた。そこで、当調査会では、前述した予想と判断に立って、調査方法、及び、調査の結果何如による以後の善処策等について東大阪市教育委員会と十分に事前協議を行なった。その結果、当調査会では、とりあえず試掘調査を実施し、その結果、遺物の多量出土、あるいは、遺構等の検出に至った時は改めて十分に事前協議を行なうという前提に立ってこの委託を受諾した。

こうした経過をもって、瓜生堂遺跡調査会では、近鉄住宅建設株式会社の委託を受けて、昭和51年3月1日より同年4月5日まで（調査総経費1,340,000円）、この試掘調査、整理事業を行なうに至ったのである。

注 (1)中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会『西岩田遺跡』（1971.6）

(2)古式土師器の甕形土器において、吉備・播磨地方の技法をもつ「酒津式」と、畿内地方の「庄内式」の土器が同一層に共存して出土している。

(3)瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』（1971）『瓜生堂遺跡・資料編』（1972）『瓜生堂遺跡・Ⅱ』（1973）

## 2. 位置と環境

今回の調査地域は、行政区画上、東大阪市西岩田3丁目にあたり、東大阪市をほぼ南北に縦断する中央環状線の西側、近鉄奈良線が八戸ノ里駅に入る高架橋の北約200mの地点に位置する。東手に道路車線を臨みながら、現在は荒地として存在し、現標高2～3mの河内平野の中でも低い位置にある低湿地域である。

河内平野全体が、南東から北西に流れる旧大和川と、南下する淀川の二大河川による沖積作用によって形成された沖積平野であることはよく知られている。過去の大和川は何本かの小河川に分流しており（恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川など）、各河川は、それぞれ、至る処で自然堤防を形成し、早くから集落の発達をみている。西岩田一帯は、旧大和川水系の一つであった楠根川が形成した自然堤防に沿って東に広がった微高地上に立地している。こうした微高地帯に、弥生時代以来、古代人の格好の生活舞台として早くより人間の居住が営まれたことは、同じような立地をもった遺跡が瓜生堂遺跡（東大阪市若江西新町）<sup>(1)</sup>、若江北遺跡（東大阪市若江北町）<sup>(2)</sup>、上小阪遺跡（東大阪市上小阪）<sup>(3)</sup>、小若江遺跡（東大阪市小若江）<sup>(4)</sup>、山賀遺跡（八尾市山賀町・東大阪市若江南町・西新町）等<sup>(5)</sup>、数多くその周辺に点在することよりも明らかである。

このように、この西岩田一帯の歴史が、古く弥生時代頃より始まったであろうことは前述した通りであるが、今回の調査地域の東方約600m地点（西岩田5丁目付近）においても、古墳時代後期の円筒埴輪、及び平安時代から鎌倉時代末と比定される土器、瓦器、陶器類の出土をみている事実は、古代以降のこの周辺地域の歴史を解明する一つの大きな手がかりにもなり得よう。<sup>(6)</sup> 今後の調査と研究の積み重ねに期する処である。

生駒山系を東の壁とし、河内平野は南北に長い低湿地平野の様相を呈するが、河内平野の歴史はそのまま旧大和川の自然作用の歴史と言えるかもしれない。その自然史としての巨大な土砂の堆積作用と氾濫のくり返しの跡は、この地域の発掘調査による土層の観察によってまざまざと見せつけられる。こうした自然のもつ偉大なまでの驚異と畏怖の中で、原始・古代人の知恵と創意の所作を垣間みた時、我々は今一度、現代社会の中における人間と自然の均衡と役割について、自らの内に問わざるを得ないのである。

とりもなおさず、今回の調査地域が、以上概述したような位置と環境の中にあることを記しておきたい。

注(1)瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』(1971) 『瓜生堂遺跡・資料編』(1972) 『瓜生堂遺跡・Ⅱ』(1973)

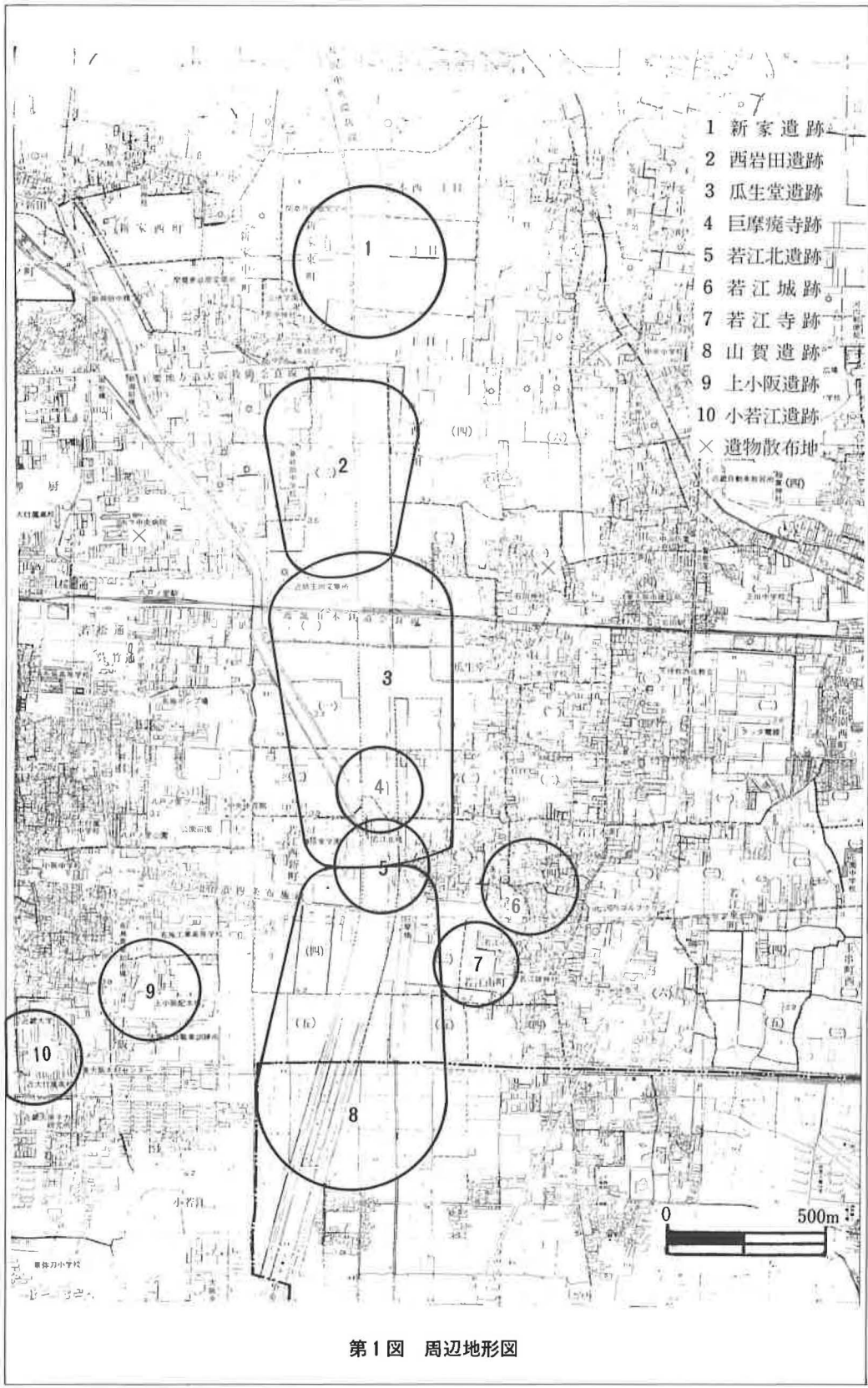
(2)財団法人大阪文化財センター『近畿自動車道天理一吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書』(1974)

(3)東大阪市遺跡保護調査会『上小阪遺跡試掘調査報告書』(1975)

(4)原田修・奥井哲秀・村上敏明「小若江遺跡の出土遺物」『河内考古学2』(1968)

(5)(2)に同じ

(6)東大阪市遺跡保護調査会『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ・岩田遺跡』(1975)



- 1 新家遺跡
- 2 西岩田遺跡
- 3 瓜生堂遺跡
- 4 巨摩庵寺跡
- 5 若江北遺跡
- 6 若江城跡
- 7 若江寺跡
- 8 山賀遺跡
- 9 上小阪遺跡
- 10 小若江遺跡
- × 遺物散布地

第1図 周辺地形図

### 3. 調査の概要

調査は、建築予定地域内に、調査孔2カ所(5m×5m・約50㎡)を南と北に設定して行なわれ、図版(一)が示すように、便宜上、北の調査孔をN孔(3CY24区)、南の調査孔をS孔(3GX13区)と仮称することにした。調査方法は、西岩田遺跡、瓜生堂遺跡、及び、その周辺遺跡の遺跡・遺物埋没深度等を考慮した上で、盛土以外は、現地地表下約7mまで、人力による掘削をもって施行した。以下、N孔、S孔の順にその調査概要を記したい。

N孔(3CY24区)……厚さ約1.7mの盛土を除去すると旧水田面と考えられるが、耕土、床土は明確に分離できない。盛土下は、褐色粘質土層が、西へゆく程厚い形で堆積しており、土師器片、須恵器片を少量だが含んでいた。この褐色粘質土層は、明らかに昭和46年に行なわれた西岩田遺跡の発掘調査の際検出された建築物遺構、及び、それに伴う須恵器、土師器群を含んでいた土層と同じものと考えられ、平面的精査を試みたが、遺構の検出はできなかった。<sup>(1)</sup>ここで付記しておけば、N孔のほぼ中央部に、近代以降に掘り抜かれた井戸遺構を検出した。この井戸と思われる遺構は、掘り方径、約2.5mでかなり急なカーブをもって落ち込み、ほぼ中心部には径、約77cmの輪状の竹皮(おそらく、井戸枠を縛ったものであろう)が残存していたが、井戸枠等は残存していなかった。掘り方、及び、中心部には近代以降と考えられる井戸瓦片、磁器片等が検出され、この井戸築造についても、現代に近い頃と推定されるため、この井戸遺構については写真撮影と略図にとどめ、それ以下の調査に移った。

褐色粘質土層以下、大まかには、約6.5mまで、大半が、褐色礫混粗砂層と青灰色礫混粗砂層(一部、青色粘土層)の互層となっているが、地表下約3m付近と5m付近においては砂層の厚さが特に厚く(1.5~2m)、この地域においても、旧大和川の氾濫と堆積、浸食作用の激しかったことを物語っていた。この地表下6.5mまでの堆積層はそのほとんどが無遺物層であったが、約3m付近の暗褐灰色粗砂層、淡灰褐色砂層下層部の二層中に、磨滅した弥生時代後期~古墳時代初頭と考えられる土器片を少量検出した。又、地表下4~5mの粘土層中には、腐蝕した植物遺体、炭化物、有機物を多く含むものもあったが、全て無遺物層であった。調査進行中、約6.5m付近において、矢板コーナーよりの湧水が急を極め、人力による掘削不能となり、残る50cmについては機械掘削によって断面観察と遺物の有無確認をするにとどまったが、遺物を含む層の確認はできず、これを以ってN孔の調査を終了した。

S孔(3GX13区)……厚さ約1.7mの盛土を除去すると、床土と思われる青褐灰色粘質土層があらわれる。以下、灰黄褐色砂層、黒褐灰色粘土層とつづき、以下4.5m付近までは間に2~3の粘土層をかみながらほぼ全体的に青灰色粗砂層の連続堆積状況であった。このS孔ではN孔にみられた褐色粘質土層は確認できなかった。4.5m付近までの各層はそのほとんどが無遺物であったが、4m付近の淡灰褐色砂層下層部、褐灰色細砂混粘土層中には、弥生時代後期の土器片を少量検出した。このS孔の厚い礫を含む粗砂層中には多くの木片(その内には径1

第一表 出土遺物一覧表

種類	点数	出土地点	備考
弥生式土器片	約46点	N孔・S孔 淡灰褐色砂層、下層部 S孔 褐灰色細砂混粘土層	後期(1点中期)
土師器片	28点	N、S孔 淡灰褐色砂層、下層部 N孔 暗褐灰色粗砂層	前期のものと思われる
須恵器片	3点	N孔 褐色粘質土層	6～7世紀?
磁器片	1点	N孔 褐色粘質土層上面	青磁?
その他、中世・近世の土器片	5点	N孔 褐色粘質土層上面	すり鉢片一点

m以上のものも含む)が検出され、激しい土砂の流動と沖積の跡を物語っていた。

地表下約4m地点までは、N孔とかなり異なった土層堆積状況を示していたが、以下7mまではN孔(特に粘土層について)と相似していた。S孔でもN孔と同様に、粘土層には植物遺体、炭化物、有機物を多く含み、一部には泥炭層があったが、すべて無遺物層であった。しかし、この土層上部は黒色を強くおびた粘土層であり、その上面から弥生時代後期の土器を出土し、又、その下位は砂をかなり含むようになることから、弥生時代後期、或いは、それ以前の時期に相当する土層であると考えられる。この粘土層より以下7mまで、一層ずつの人力掘削によって調査を進めたが、遺物の出土・遺構の存在する層の確認はできず、これをもってS孔の調査を終了した。

注(1)中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会『西岩田遺跡』(1971・6)



N孔井戸遺構検出状況



#### 4. 出土遺物

出土遺物については、若干の須恵器、土師器、陶質土器、磁器類の他は、その大半が弥生式土器と思われるが、すべて破片であり、一部には磨滅の進んだものも含まれている。そのため、ここでは実測可能なものについてだけ図示し、その説明を加えておきたい。

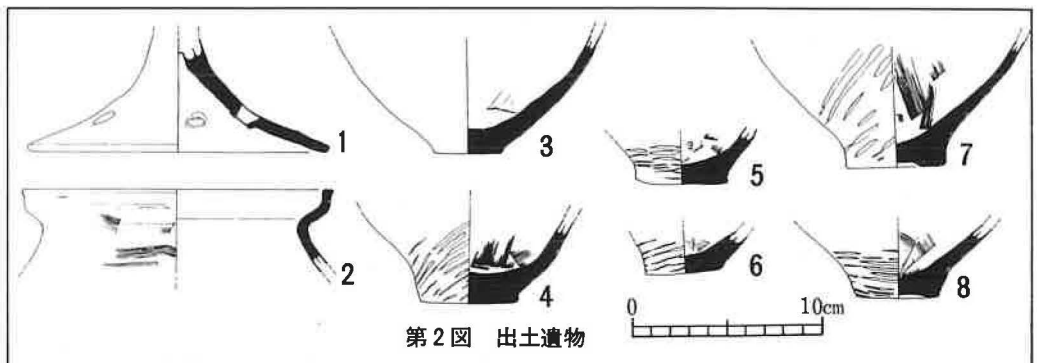
(1)は高杯脚部で、なだらかなラップ状に広がる裾部をもつ。透し孔の穿孔は焼成前に行なわれ、ほぼ対称位置に4孔みられる。外面は磨滅が進んでいるが、内面にはヘラ削りによる調整の跡が残っている。脚部内面の絞り目については、のちのヘラ削りによって消され、わずかにその痕跡をとどめる程度である。色調は淡茶褐色を呈し、石粒を多く含む胎土である。N孔、淡灰褐色砂層下層部出土。

(2)は甕の口縁部で、くゞの字形に外反する口頸部からほぼ垂直に立つてのび、いわゆる受口状口縁を呈するものであり、口縁端部は面をつくり、わずかに外側に肥厚している。胴部外面には刷毛目、内面にはヘラ削りと思われる跡を残すが、やや磨滅して不詳である。色調は黒茶褐色を呈し、胎土は石粒を多く含み、表面にかなり露呈している。N孔、暗褐灰色粗砂層より出土。

(3)~(8)はすべて底部のみ残すものであるが、おそらく甕、あるいは鉢の底部であろう。(3)以外はすべて外面に叩き目を残し、内面は刷毛目による調整が施されている。平底のもの(3)~(6)とや、上げ底(7)、(8)のものがある。外面の叩き目方向は、右上りのもの(4)、(6)、(7)と、平行、ないしや、右下りのもの(5)、(8)とに分けられる。又、(6)については底面にも叩き目が施されている。色調は大別して、暗茶褐色を呈するもの(5)、(6)と淡茶褐色を呈するもの(3)、(4)、(7)、(8)があるが、すべて外面に部分的ではあるが黒煤が付着している。胎土中いずれも細かい金雲母片と石粒を含むが、中でも(3)、(4)の胎土は比較的緻密である。(3)~(8)、すべてS孔、淡灰褐色砂層下層部より出土。

尚、これらの出土遺物は、その形態、技法上等より、弥生時代後期（畿内第V様式）から古墳時代初頭に位置付けられるものと考えられる。中・南河内地域における畿内第V様式から古墳時代初頭の土器型式の細分化については、近年、精力的に行なわれているが、今回の出土遺物の性格上、この点についての言及はここでは避けたい。<sup>(1)</sup>

注(1)都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』第20巻第4号、1974)



## 5. まとめ

今回試掘調査を実施した場所は広大なマンション建築予定地に対しきわめて小さな点にすぎず、出土遺物、土層の観察判断は困難をきわめた。したがって今回の試掘調査では十分とらえきれなかった遺跡範囲の問題も、今後周辺部の調査を押し進めることによってその輪郭をはっきりさせることができると考える。

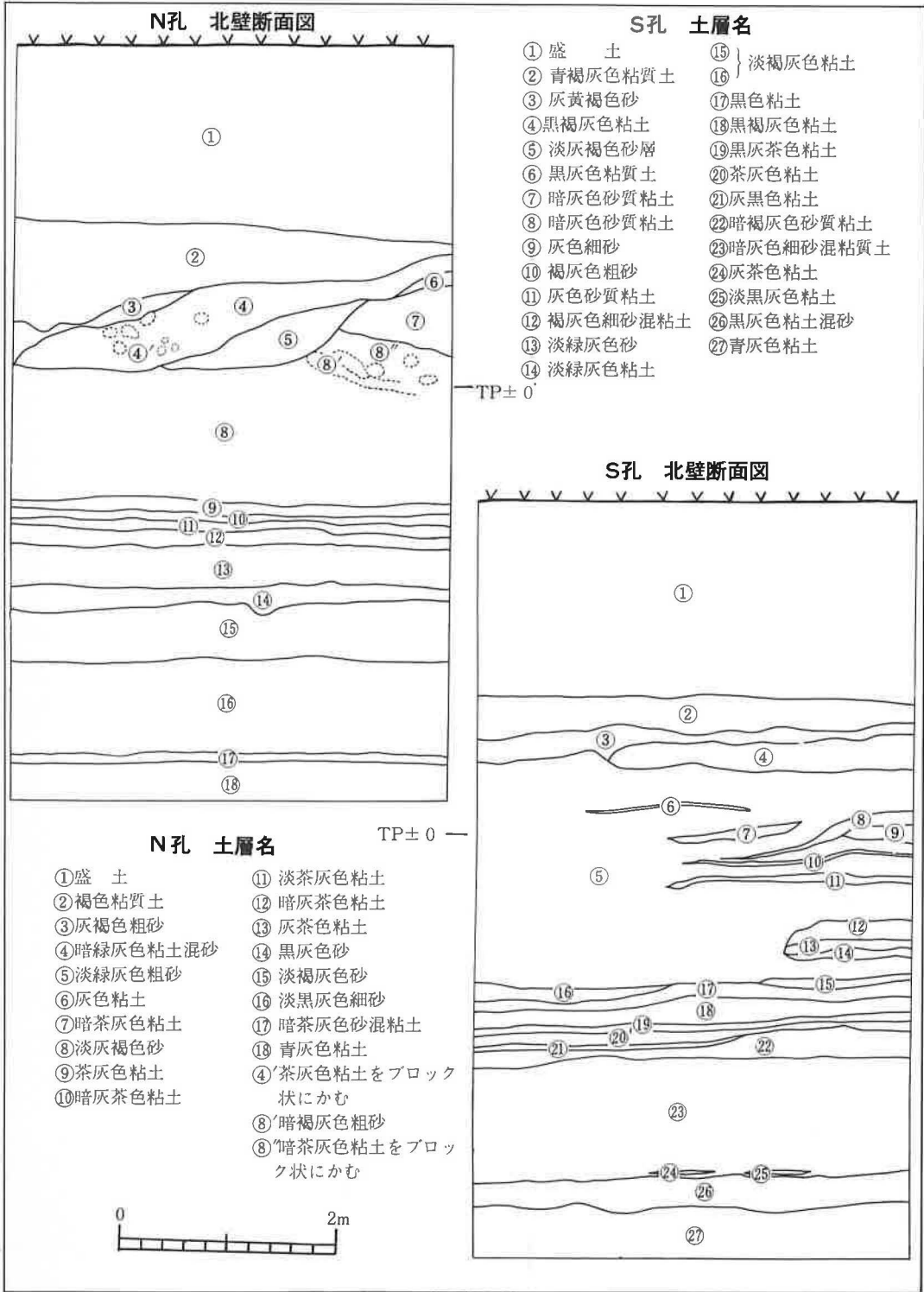
- (1) 今回実施したN・S両孔において、古墳時代～平安時代の遺構は褐色砂層、あるいは粘土層で、弥生時代の遺構は青灰色砂層～粘土層上面にあると考えられたが、遺構はみられなかった。唯一検出した井戸状遺構は、その内部から出土した井戸瓦等より現代に近いものと考えられる。
- (2) 各土層から出土した土器は、弥生時代後期～古墳時代前半、及び、古墳時代後半以降とにわかれ、T.P+1m・-1m付近より出土したものは成形・手法が観察できる位保存の良好なものだが砂層中にまぎれこんでいたものは激しく磨滅している。この両者の保存面の差から、一応、流入した混入物とそうでないものに区別できる。
- (3) 土層は大半が盛土と砂層で、特にT.P+1m～T.P-1mは砂層の堆積が著しい。この砂層は礫を含み、大きいものは径5cmもある。またS孔では根回り径1m以上もある杉の巨木が押し流されていた。これらのことから、弥生時代中期以後、後期において、大洪水による土砂の堆積が想像を絶する位激しかったことの資料を得ることができた。
- (4) N孔で確認された褐色粘質土層は、昭和46年、西岩田遺跡で調査された土層と非常に類似するものであり、北側へどのように連続するか、今回の調査を機会に周辺の調査の足がかりとしたい。

S孔の砂層下(T.P-1.5m付近)で確認された15層～17層(一部は泥炭状になる位植物遺体が堆積している。スレート状に分離し、非常にもろい。)、18層～23層(上位は黒色が強く、下位にいくほど青灰色がかってくる。)は、瓜生堂遺跡で弥生時代中期の遺物包含層にいたる土層堆積状態と対照して非常によく酷似している。以上のように、深部では瓜生堂遺跡、浅部では西岩田遺跡の広がりを示唆していることが遺物出土状況、土層堆積状態より十分に窺い知ることができた。

- (5) 今回の試掘調査結果から、この地区周辺は今後も十分な注意が必要であり、集落中心部から相当離れたこの地区の性格、役割については今後の調査研究にまきたい。

図版一 瓜生堂遺跡地区割図及び調査位置図







調査前の状況



調査風景



N孔・地表下 2 m 付近北壁断面



S孔・地表下 4 m 付近北壁断面

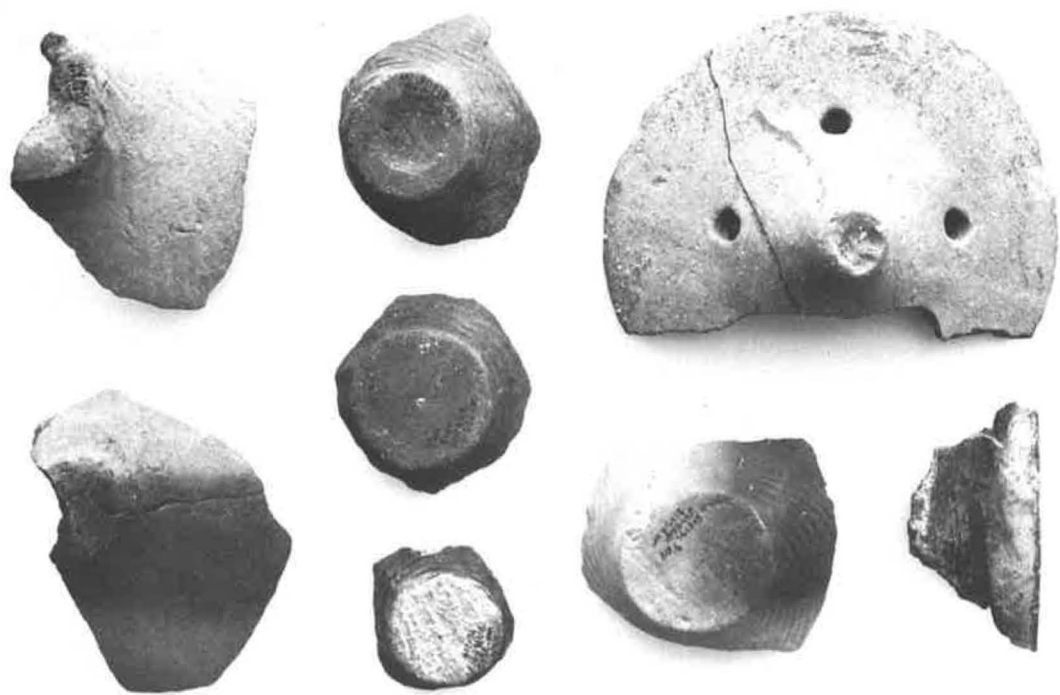


S孔・地表下5m~6m付近北壁断面



S孔・地表下7m到達時

図版六 出土遺物



N・S孔出土遺物



N・S孔出土遺物